

# ●寄居蟲族新分類法(豫報)

理學士 寺 尾 新

本篇に述ぶる所の寄居蟲族とは、Paguridea とする tribe (族) 全體の事なり。予が今まで慣用し來れる寄居蟲類といふ語とは、其意味を異にする。寄居蟲類とは、寄居蟲族より、タラバガニなどを含む Lithodidae とする一科を除きたるものなり。寄居蟲族新分類法に就ては、目下歐文の原稿起草中なれば、詳細の點は是に譲りて、茲には單に骨子のみを概説するに止むべし。

從來、採用せられし寄居蟲族の分類法は次の如し。

Order Decapoda

Suborder Reptantia

Section Anomura

Tribe Paguridea

Family 1. Pylochelidae

„ 2. Paguridae

„ 3. Coenobitidae

„ 4. Lithodidae

以上の外、Lomisidae とする一科を別に設くる人もあり。又、此の科を Lithodidae に合併する人もあり。而して、Paguridae を分ちて、更に Pagurinae 及 Enpagurinae の二亞科となすを常とす。此兩亞科は ORTMANN の設立に係り、次の如き特徴を有す。

(一) Pagurinae — 第三顎脚の基部、近接す。且つ左螯が右螯よりも大なるを常とす。

(二) Eupagurinae — 第三顎脚の基部、相隔離す。且つ右螯が左螯

よりも大なるを常とす。

上述の特徴中、後半は、兩亞科共に分別し難きに至る程の中間的の場合あれば、良好なる區別點にあらず。然れども第三顎脚の基部の隔離若くは近接は、例外なしと思考せられ居りしが、ALCOCK 既に一九〇五年、其例外を指摘せり。即ち *Aniculus strigatus* (HERBST) は、軀扁平にして、第三顎脚は、此屬の他種とは異にして、其基部、廣く隔離せり。ALCOCK は尙進んで、*Oliva* の介殼内に住みて軀形扁平となれる *Diogenes miles* (HERBST) に於ては、第三顎脚、其基部に於て近接せるを引例し、單に軀形扁平となれるが爲に、第三顎脚の基部相隔離するに至れるにあらずと論述せり。ALCOCK が *Aniculus strigatus* の場合を説明するに、他屬他種の寄居蟲の例を以てしたる論證の當否は姑く之を措かん。前記兩亞科の區別點を無に歸せしむるは他にも一例あり。

琉球より獲たる *Pagurus platythorax* STIMPSON は軀形扁平なる事、學名の示す通りなるが、予の檢する所によれば此の種に於ても、第三顎脚が基部に於て、相隔離せり。即ち *Aniculus* 屬に於て一種、*Pagurus* 屬に一種、前記 ORTMANN の亞科の價値を疑はしむるものあるなり。

乃ち、予をして Paguridae といふ科の分類法の改正——若し出來得べくんば寄居蟲族分科の分類法の改正——を試みんと企圖を抱くに至らしめたり。

系統的の分類法に對して有力なる材料を供給するは化石學なり。化石學上の材料を適當に處置せば、吾人は當面の生物類群の系統を、或程度で推論する事を得べし。十脚甲殼類の化石は泥盆紀に現はれ、三疊紀・侏羅記に至つて、其種類の數夥しく増加せり。然れ共寄居蟲の化石は殆ど全くなしといふも可なり。唯中新統の地層より發見せられし鰓脚を、BROCCHI によつて、*Pagurus priscus* BROCCHI と名けられたるあれど、OREMAN が批評せるが如く、果して、*Pagurus* 屬の甲殼類の鰓脚なりや否やは疑はし。予は近來の研究の結果を知らんとて、“International Catalogue of Scientific Literature”の K. — Palaeontology の部を調査したるが、不幸にして其 No. 7 は見る事を得ず。此の號の事は姑く度外視し置かば、前記の例の外に更に唯一つの例を加へ得たるに過ぎず。即ち *Pagurus mezi* として LORENZHEIM が報告せるものなり。地層は上部近生界(中新統、鮮新統)に屬すといふ。されど其原著は之を手にする事を得ず、又、上述の如く“Catalogue”の No. 7 も見る事を得ざるが故に、確言を憚れども、要するに KARL. V. ZITTEL が“Grundzüge der Paläontologie” I. Abth. : Invertebrata, 3. Auf., 1910 に總評を下して、化石の甚しく尠なる事、

及化石が不完全なる遺物に過ぎざれば、査定も亦全然不確實なる事をいへるは、蓋し、大過なき言なるべし。然らば、化石學上より系統を論せんと欲するの企圖は水泡に歸せざるを得ず。

發生學上の事實は、化石學上の事實と同様に系統を論ずるに當りては有力なるものなれ共、吾人が現今有する此族發生に關する知識は頗る斷片的にして、委曲を盡せるものなし。殊に深海産の珍品に至りては、全く發生學上の知見を缺く。故に發生學上より立論して此類の系統を説述するは、之を他日に期せざるべからず。

最後に、予が取つて以て予の目的を逐行するに資せんと欲せるは、比較形態學上の材料なり。此族を通覽するに、予の見る所によれば、次の四種の鰓式あり。

第一類。鰓の總數十四。排列の有様次の如し。

體節の番號	八	九	十	十一	十二	十三
關節 鰓	二	二	二	二	二	〇
側 鰓	〇	〇	一	一	一	一

第二類。鰓の總數十三。第一類に比すれば第十三體節の側鰓なき點に於て異なり。即ち次表の如し。

體節の番號	八	九	十	十一	十二	十三
關節 鰓	二	二	二	二	二	〇
側 鰓	〇	〇	一	一	一	〇

第三類。鰓の總數十一。第二類に比すれば、更に、第十及第一體節の側鰓なきを特異の點とす。

體節の番號  
關節鰓  
側鰓

八	九	十	十一	十二	十三
〇二	〇二	〇二	〇二	一	〇〇

第四類。鰓の總數十。側鰓全くなし。即ち次の如し。

八	九	十	十一	十二	十三
〇二	〇二	〇二	〇二	〇二	〇〇

關節鰓と側鰓とは分別し難き事ありとは、屢々論せらるゝ所なり。今、上述の鰓式に於て此兩者の差別を、誤解を妨がらんが爲撤去すとも、或體節に於る鰓の數が三なるか二なるか一なるか若くは全く存在せざるかは、確認し得らるゝ所にして、且つ、總數の幾何なるかをも明に認むるを得べきなり。此等の點だに確かならば、是のみに依憑すとも、こゝに四種類の鰓の排列法あるを認むる事を得べし。予が、是より論歩を進むるには、關節鰓・側鰓兩種類の差別を認めずとも、支障なき事を茲に明言す。

鰓式が、系統を論ずるに當りて重要なものなりとは BOAS, BOUVIER の考へたる所にして、BOUVIER の如きは、鰓式の差異を主眼として、Lomis 屬をタラバガニの類群より分ち、此類群と同等の格の類群を新に Lomis 屬の爲に設けて、相對立せしめたり。然れ共、BOUVIER は鰓式以外の性質、例へば有對的胴部附屬肢の存在などを一層重要視したる事あり。Paguristes を Mixtopagurus (= Pomatocheles) の直系の後裔と考へたるが如き其一例なり。予は今、鰓式を最も重要なものと看做し、此に

從つて先づ寄居蟲族を大別し、次に胴部の形質等を考量して之を更に細分せんと欲す。即ち、恰も或一定の鰓式を具へたる類群が先づ存在し、其各類群が個々別々に、有對的胴部附屬肢の、漸次的消滅等を行ひたりと看做したるが如き分類法を採用せんと欲す。

陸産の寄居蟲なる *Coenobita* 及此屬に近似なる *Birgus* 屬に於ては、海産の *Pagurus* などと同じ鰓式を有し、前部關節鰓に多少退化の現象を見れども、四個の側鰓には、毫も變化なし。然るに他の寄居蟲にては、或は側鰓の數少く、或は全くなし。故に、失はるべくして、失はれずに存在せる側鰓には、何等かの意義あるべしてふ事に想到するなるべし。其意義の系統的なりや否やは別問題として、之を重要視するは、亦故なきにあらずといふを得べし。系統的意義の有無に就ては吾人は他方面より論評するの材料を欠く。而して、之を重要視する事 BOUVIER 以上ならしむる事も、他に論據あるにあらず。しかく思考するが故に、思考するのみ。而も、しかく思考すべからずてふ事に對しても亦、予の觀る所を以てすれば、全く證據なし。

鰓式を過重すべからずと唱ふるは CALMAN なり。されど彼の論據とせる *Pandalus* と *Pandalina* 及 *Caridina* と *Limnocaridina* とに存する類似點が、鰓式の差異よりも重んずべきに對して、別に發生學上などの證據あるに非ず、彼の獨特の觀方たるに止る。

(134) 大 正 四 年 三 月 十 五 日

比較形態上、鰓式の外、尙、注意すべきものに、鰓片及口部附屬肢の形態あり。口部附屬肢に就ては唯嚴密なる區別點として用ひ難き事を指摘するに止むべし。鰓片の二列(即ち葉狀鰓)なるか、四列(即ち毛狀鰓)なるかに着目して、SMITHは、前者を Paguridae に、後者を Parapaguridae に屬せしめたり。然れ共兩者の中間的形質を具ふるものあり、此兩科は截然たる境界を欠く。

第三顎脚の基部の近接又は隔離、并に、鰓の數等は、成體の直前の幼蟲期たる Glaucothoe 期幼蟲期に於て、既に成體と全く同じきが如きが故に、此等の形質の孰れが初發的なるかてふ事に關しては、更に發生上の初期に於て、其解決を求むべき事と思はる。此點に關する詳論は一切之を茲に省略す。

予は今左に、寄居蟲族新分類法を摘記するに當り、再び此分類法が、特に系統的意義ありと主張するもの非る事を特筆し置かむとす。予の提出の理由は便利といふ一語に盡く。然れ共同時に系統的意義全くなしといふに非ず。吾人は BOUVIER の論述が全く迷妄なりと論斷を下す能はず。又 SARS が、Spirohagurus と Eupagurus とが、發生上頗る近縁なる事をいへるは、左の分類とよく調和するを見る。されど系統的意義の存否は、能く之を措くといふを隱當なりと予は思考す。

Fam. 1. Paguridae, emend. With 14 gills.

Subfam. 1. Pylochelinae SPENCE BATE.

Pomatocheles, Pylocheles, Parapylocheles, ? Chirophlataea,  
Subfam. 2. Lomisinae BOUVIER.

Lomis.

Subfam. 3. Pagurinae, emend.

Pagurus, Aniculus, Cancellus, Petrochirus.

Subfam. 4. Coenobitinae DANA.

Birgus, Coenobita.

Fam. 2. Paguristidae, nov. fam. With 13 gills.

Paguristes, Diogenes, Calcinus, Clibanarius, Paguropsis, Troglapagurus, ? Holopagurus, Isocheles, ? Stratiotes, \*Munidopagurus, \*Tomopaguropsis, \*Pylopaguropsis, \*Xylopagurus.

Fam. 3. Eupaguridae, nov. fam. With 11 gills.

Subfam. 1. Eupagurinae, emend.

Enpagurus, Spiropagurus, Pylopagurus, Parapagurus, Anapagurus, Catapagurus, Pagurodes, Nematopagurus, Catapaguroides, Tomopagurus, ? Tylaspis, ? Porcellanopagurus.

Subfam. 2. Lithodinae BOUVIER.

Hapalogaster, Dermatus, Placetron; Phyllolithodes, Neolithodes, Paralithodes, Lithodes, Acantholithus, Paralomis, Rhinolithodes, Echidnocerus, Cryptolithodes.

Fam. 4. Ostraconotidae, nov. fam. With 10 gills.

Ostraconotus.

第二科中、\*を附したるは、第三顎脚が基部に於て相隔離せるものなり。而して、第三科、第四科は全部、第三顎脚が基部に於て相隔離せるは著しき事なり。?を附したるものゝ詳論は之を省略す。